サポチル　認定NPO法人 子どもの心理療法支援会 主催

2023-2024年度

京都精神分析・臨床セミナー

ごあいさつ

20世紀の始まりと時を同じくして誕生した精神分析は、20世紀の社会的な価値観や文化的な変遷をたどる中で変化してきました。今世紀に入り社会や文化が大きく変化する中で、精神分析実践の社会的意義は変容し、週複数回の精神分析という限られた実践を超えた応用領域の意義が高まっています。そうした状況の中で、本セミナーではそれぞれのテーマで分析理論がどのように発展し得るのか、再考することを目指します。

認定NPO法人子どもの心理療法支援会　理事長　平井正三

今年度のテーマは、**「社会との接点の中で、精神分析理論を再考する」**

	月　日	講　師	テーマ	オンライン	リアル会場
第1回	2023年 11/12(日)	北村 婦美 先生	精神分析における セクシュアリティとジェンダー	Zoom開催	ハートンホテル京都
第2回	2024年 1/7(日)	平井 正三 先生	子どもと家族の分析臨床の行方 ―家族の変容と精神分析の課題		ハートピア京都
第3回	2024年 3/3(日)	奥寺　崇 先生	同一化の文化論 ―孝行、自己犠牲、甘え―		調整中
第4回	2024年 4/21(日) この回は 13～18時	淺田 慎太郎 先生 櫻井　鼓 先生 田中 健夫 先生	自己の病理が犯罪化すること 加害者の被害者性を見出すことへの問い 同一化を強いられた自己をめぐる臨床		ハートピア京都
第5回	2024年 6/9(日)	西村 理晃 先生	精神分析臨床の「場」を再考する ～パンデミックの経験を通して～		※オンラインでのみ
第6回	2024年 7/21(日)	森　茂起 先生	精神分析はなぜ戦争について考えるのか		調整中

※オンライン参加とリアル会場参加で、ポイントの扱いが異なる場合があります。
※新型コロナウイルス感染症COVID-19の影響により、オンラインのみの開催となる場合があります。

「基礎の基礎セミナー」臨床セミナー開催日午前中(10:30～12:00)御池心理療法センターで開催

第1回	平井 正三 先生 「導入：精神分析とは何か？」	第4回	鵜飼 奈津子 先生 「子どもの精神分析臨床：基礎の基礎」
第2回	津田 真知子 先生 「心理療法を精神分析的に行うことの諸問題」	第5回	飛谷　渉 先生　※オンラインでのみ 「青年・成人の精神分析臨床：基礎の基礎」
第3回	鵜飼 奈津子先生 「タビストック方式乳児観察：ビデオと解説」	第6回	平井 正三 先生 「終結：ふり返りと研修プログラムの説明など」

参加費

臨床セミナー（全6回受講）……5万円（※振り込み）大学院生、研修生の方は4万円で受講いただけます。
今年度も引き続き、会員以外の方の単回受講もお受けいたします。
単回受講は1回1万2千円
会員、大学院生の方は1万円で受講いただけます。

基礎の基礎セミナー（全6回受講）…1万円（オンライン受講も可能です。）

※詳しい申し込み方法は最後のページをご覧ください。

時　間

各回 **13:00－17:30**
●前半2時間【講義】　●後半2時間半【事例検討】
※第4回は13時～18時です。
パネルディスカッションを行い事例検討はございません。

Zoom

参加方法：各回の時期が近づきましたら、IDとPWをお送りして
ウェブ会議アプリzoomから参加

ハートンホテル京都
烏丸御池駅より徒歩約2分

ハートピア京都
丸太町駅5番出口すぐ

臨床セミナー申し込みについて

■ 定 員 数：80名(先着順)
■ 対 象 者：臨床心理士・公認心理師・医師などの専門家、大学院生、研修生
事例に関する情報の守秘を厳守できる方
■ 受 講 料：5万円(大学院生、研修生は4万円)

■ お申し込み方法

下記URLから申し込みフォームにて必要事項をご記入ください。

https://forms.gle/HvktHCY3HW5LpEEo6

※申し込み内容を確認の上，改めて振込口座と参加費をご案内いたします。
rinsemi@sacp.jpからのメールを受信できるようにしておいてください。

■ 基礎の基礎セミナー申し込み

申し込みサイトの「基礎の基礎セミナー希望」の欄にチェックをしてください。
現地とオンラインの参加合わせて先着順（定員15名）となっております。
初回参加の方を優先させていただきます。
後日、受講方法と受講料のお支払いについてご連絡いたします。

※参加費を、臨床セミナー費と同時に振り込まないでください。

申し込み締切：2023年10月31日(火) ※先着順なのでお早めにお申し込みください

サポチル会員　募集中！

現在（2023年5月末）、**ボランティア会員**8名、**専門会員**172名が、サポチルの研修プログラムへの参加をはじめ、研修会の企画運営、広報事業などに携わっています。サポチルの活動への積極的なご参加をお待ちしています。申し込み方法は、Webサイト【http://sacp.jp】をご覧ください。

また寄付により、子どもの心理療法の料金を支援していただく**賛助会員**も募集中です。2023年5月末現在で124名の寄付者の方にご支援をいただいています。寄付はWebサイトからのクレジットカード決済、もしくは郵便振替(一口5千円より)でお願いします。

●Webサイト【http://sacp.jp】「サポートのお願い」のページをご覧ください。
●郵便振替　【口座番号：00990-0-192194　NPO法人子どもの心理療法支援会寄付金】

多くの方のご寄付により、経済的理由で心理療法を受けられないお子さんに心理療法を提供することが可能となっております。
ご支援、ご協力をいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

みんなの協力で、子どもたちが心のケアを受けられる社会へ。
サポチル
認定NPO法人　子どもの心理療法支援会

認定NPO法人 子どもの心理療法支援会 事務局
e-mail:info@sacp.jp　URL:http://sacp.jp
〒604-8187 京都市中京区東洞院通御池下ル笹屋町444初音館302
FAX：075-600-3238

2023-2024年度　京都精神分析・臨床セミナー　運営スタッフ

臨床セミナー運営スタッフ　林 秀樹（基礎の基礎セミナー）　大原 咲子　堀内 瞳　村田 りか　松崎 佑亮　山本 梓　島田 友紀

理　事　吉岡 彩子　井上 祐（臨床セミナー担当）　竹田 駿介（臨床セミナー担当）　脇谷 順子　河邉 眞千子　小笠原 貴文　西村 理晃　藤森 旭人　吉沢 伸一　小島 香織　仁木 一栄

理事長　平井 正三
副理事長　津田 真知子
顧　問　鵜飼 奈津子　飛谷 渉
監　事　鈴木 誠

2023-2024年度　京都精神分析・臨床セミナー　スケジュール

★講師が挙げている参考文献は講義内容を補うものです。

第1回 2023年11月12日(日)

精神分析におけるセクシュアリティとジェンダー　北村 婦美 先生

現代社会におけるジェンダーやセクシュアリティをめぐる考え方は、現在非常な勢いで展開しているように見えます。
そんな社会に生きる人びとの語りに耳を傾け、その意味に着目してゆく心理臨床の大きな理論的支柱の一つが精神分析ですが、この精神分析はジェンダーやセクシュアリティについて、どのようなとらえ方をしてきたのでしょうか。また現在はその中で何が再考され、どのような考え方の変化が生じてきているのでしょうか。
本講義では、「男根一元論」と称されたフロイトの理論から、それを補完したクラインによる「乳房」への着目、さらに「精神分析的ジェンダー論」における複雑なジェンダーの成り立ちの把握へと向かいつつあるこれまでの流れを、おおまかにつかむことを目的としています。またその際には、現在まだ議論の続いている部分はそれとしてなるべく中立的立場からご紹介し、受講される方に考えを深めて頂くための材料をご提供したいと考えています。
初めてこうした切り口から精神分析を学ぶという方にもできるだけ分かりやすくお話しするつもりですので、どうぞふるってご参加下さい。

参考文献	Benjamin, J. (1998) Shadow of the Other: Intersubjectivity and Gender in Psychoanalysis. Routledge, New York.　ジェシカ・ベンジャミン著、北村婦美訳 (2018) 他者の影. みすず書房 Breen, D.B. (1993) The Gender Conundrum: Contemporary Psychoanalytic Perspectives on Femininity and Masculinity. Routledge, New York. Chodorow, N. J. (1995) Gender as a personal and cultural construction. Signs Vol. 20, No. 3, pp. 516-544, The University of Chicago Press. Freud, S. (1933) Femininity. In New Introductory Lectures on Psycho-Analysis. S. E. Vol. XXII. The Hogarth Press, London. 道旗泰三訳 (2011) 続・精神分析入門講義　第33講　女性性. フロイト全集21. 岩波書店 北村婦美 (2016) 総説 フロイトの女性論再考―新しい両性性理解の可能性. 精神分析研究60, 163-179 北村婦美 (2020) 精神分析とフェミニズム―その対立と融合の歴史. In: 西見奈子著・編、北村婦美、鈴木菜実子、松本卓也著 (2020): 精神分析にとって女とは何か. 福村出版
ご所属	東洞院心理療法オフィス / 太子道診療所

第2回 2024年1月7日(日)

子どもと家族の分析臨床の行方 ―家族の変容と精神分析の課題　平井 正三 先生

今世紀に入り、社会は急速に変容しつつあります。その端的な表れの一つが家族の変容です。前世紀の日本社会を支えていた経済発展-家父長制的なイデオロギーが堅固なものでなくなるとともに、学級崩壊、そして「家族」の崩壊が露呈してきているように思います。それは新しい形での社会-生活への向かう過渡期なのかもしれません。このように変化と移行の社会の中で子どもと家族の分析臨床はどのような役割を果たしうるのか考えていきたいと思います。

参考文献	平井正三『意識性の臨床科学としての精神分析―――ポスト・クライン派の視座』金剛出版 ラスティン&カグリアータ編　木部則雄監訳『こどものこころのアセスメント』岩崎学術出版社
ご所属	御池心理療法センター／サポチル

第3回 2024年3月3日(日)

同一化の文化論　―孝行、自己犠牲、甘え―　奥寺　崇 先生

精神分析において文化は、より表層に位置付けられてきた。そのため、東洋文化、すなわち非クリスティアニティにおける情緒発達についてS. フロイト以来の発達論はそのまま適応されてきたし、私達東洋人が被分析者として精神分析の俎上にのぼる際にも同様の扱いを受けてきていると考えられる。演者はこのような考えそのものについて異論を唱えることはしない。しかしながらそれぞれの文化に彩られた社会における発達の目指すところには、精神分析における成熟したパーソナリティとは相容れない有り様があるのではないか。　極論すればそれは「未熟である権利」と言っていいのかもしれないし、そこには逆説的に「文化」を超えたユニヴァーサルな有り様があるということができるように思う。
本講では、このような問題提起に基づき、ああでもない、こうでもないといったフロアとのディスカッションを企てたい。

参考文献	C.Bollas (2011) “Character and interformality”, Chapter 15 in Christopher Bollas Reader T.H. Ogden (1982) 邦訳:“投影同一化という概念“、第2章および”母親の過剰な投影同一化による発達への影響“第５章、いずれも「投影同一化と心理療法の技法」金剛出版
ご所属	クリニックおくでら

■研修ポイントについて

- ●当セミナーは、日本臨床心理士資格認定協会の「定例型研修会（4ポイント）」として承認されています。
  5回以上出席の方に「研修証明書」をお渡しいたします。
- ●オンライン参加のみの方も4点となりますが，オンライン参加としての研修証明書を発行する予定です。
- ●単回受講は，臨床心理士の研修ポイントの対象とはなりません（全回受講者のみ申請予定）。

みんなの協力で、子どもたちが心のケアを受けられる社会へ。
サポチル
認定NPO法人　子どもの心理療法支援会

認定NPO法人 子どもの心理療法支援会 事務局
e-mail:info@sacp.jp　URL:http://sacp.jp
〒604-8187 京都市中京区東洞院通御池下ル笹屋町444初音館302
FAX：075-600-3238

第4回 2024年4月21日(日) ※この回は13時～18時です

自己の病理が犯罪化すること　淺田 慎太郎 先生

私は司法心理療法（forensic psychotherapy）の観点にもとづいて、自立準備ホームで元受刑者に関わっている。出所とは再犯リスクとの再会を含んでおり、彼ら自身しばしば無意識的に再犯の恐れを感じている。犯罪の発生を動機づけるかもしれない精神力動的布置を見立てることは、彼らの行為と心理とを橋渡しし、関係の中でのコミュニケーションの可能性を開くことにつながると考えられる。今回の講義では、統計的な再犯リスクについて紹介したのち、事例ヴィネットを用いて、犯罪の問題を持つ者の自己の状態について注目したい。犯罪を自己の病と考えたとき、そこには加害性―被害性―傍観性の三つ組みが作用していると考えられている。彼らが自己の布置をいつ誰に投影し、またいつどこに同一化しているかは、刻一刻と変化する。支援者の心が振り回されるように、彼らもまた自己の状態に振り回され、犯罪として現実化するプロセスを辿っている。このような犯罪という問題を抱えた彼らの苦悩について、理解する糸口を探りたいと思う。

参考文献	Cordess,C., & Cox, M. 1996 Forensic Psychotherapy: Crime, Psychodynamics and the Offender Patient. Jessica Kingsley. 作田　明（監訳）2004　司法心理療法―犯罪と非行への心理学的アプローチ―　星和書店. Welldon, E. V., & Velsen, C. V. 1996 A Practical Guide to Forensic Psychotherapy. Jessica Kingsley. Yakeley, J., & McGauley, G. 2017 Forensic Psychotherapy. Routledge.
ご所属	NPO法人風の家、たちメンタルクリニック、甲南大学、神戸松蔭女子学院大学大学院

加害者の被害者性を見出すことへの問い　櫻井　鼓 先生

発表者はこれまで非行少年を対象とした加害者臨床、犯罪被害者等を対象としたトラウマ臨床という加害と被害双方の臨床実践に携わってきた。一般にも、トラウマ体験をした人が PTSD などの精神的影響を被ること、非行少年の中には、虐待などのトラウマ体験をもつケースのあることが知られてはいる。しかし、臨床実践において加害者の被害者性と被害者のトラウマを、同質のものとして考えることはできないと感じている。犯罪分野で加害者臨床に携わるのであれば、犯罪行為について扱うことは必須になるが、果たして、加害者の被害者性を見出すことは再犯防止に役立つのだろうか。
発表者は現在、刑事事件に係る犯罪被害者の精神鑑定に携わっている。被害者の場合も被疑者の場合も、鑑定は、犯罪行為にまつわる背景や心理をつぶさに検討するものである。そこで当日は、かつての連続幼女誘拐殺人事件における被疑者の鑑定書などをもとに、臨床実践において加害者の被害者性を見ることの是非を検討したい。

参考文献	特になし
ご所属	横浜思春期問題研究所／追手門学院大学

同一化を強いられた自己をめぐる臨床　田中 健夫 先生

発達過程の中で他者から押しつけられ／植えつけられた，もともとの自己には由来しない罪悪感を手放していくこと（喪の哀悼）は，それに同一化することで形成してきた自己のありかたを変えていく心的苦痛をともなうものとなる。臨床実践においては，関係性の中に表現されるものをとらえ，あるいは集団場面での行動化をきっかけにした認識がまずはその始まりとなり，被害感の由来となるものを識別し，押しつけられたものを自我異和的なものと体験していく過程を支えていく。こうした支援の意義と難しさを考えてみたい。

参考文献	Ferenczi, S. 森茂起・大塚紳一郎・長野真奈(訳) (2007) 精神分析への最後の貢献：フェレンツィ後期著作集　岩崎学術出版社. Srinath, S. トラウマにおける同一化過程　Garland,C.(編)　松木邦裕(監訳) (2011) トラウマを理解する. 岩崎学術出版社, pp.149-162.
ご所属	東京女子大学／吉祥寺サイコセラピーオフィス

第5回 この回はオンラインでのご講義となります。 2024年6月9日(日)

精神分析臨床の「場」を再考する ～パンデミックの経験を通して～　西村 理晃 先生

精神分析臨床において「場」とは精神分析プロセスを実現し、その進展、進化を支える極めて重要なものとして考えられている。それは、人と人とがつながり、関わる場、つまり心と心が交流する「場」であり、その営みが層をなして進化を遂げうる外的、そして内的な「場」である。Covid-19によるパンデミックで多くの臨床家、クライエントが余儀なく経験した「場」の喪失、そしてそこから生じたリモートという新たな臨床の「場」は、従来半ば当然視されていた人と人とが具体的に出会う「場」を問い直す機会、さらには外的だけでなく内的なものを含めた「場」そのものについて再考する重要な経験をもたらしたと言えるだろう。本セミナーでは、パンデミックが現時点までに精神分析臨床にもたらした経験をみなさんと一緒に振り返り、精神分析臨床における「場」の再考を試みたい。それを通して“つながり”を有機的に醸成する精神分析の学びの場をみなさんと体現することを目指したい。

参考文献	特になし
ご所属	19 Bloomsbury Square Psychoanalysis and Psychotherapy

第6回 2024年7月21日(日)

精神分析はなぜ戦争について考えるのか　森　茂起 先生

フロイトの Why War? にはじまり、精神分析家たちは戦争について様々の形で語ってきた。「戦争神経症」の治療にも重要な知見を提供してきた。その一方で、分析において戦争が扱われることは少ないと思われる節がある。分析が影響を受ける社会的状況のなかで、戦争は、最大の事象であるにも関わらず、分析の中で扱うには特殊な困難があるように見える。戦争という事象が現在の政治的状況に深く関係するために起こる扱いの難しさは困難の重要な要素である。治療関係に作用するその困難を整理しながら、それでもなお精神分析が戦争を対象とすることの重要性を確認し、方法論を考えたい。

参考文献	フロイト&アインシュタイン『ヒトはなぜ戦争をするのか?―アインシュタインとフロイトの往復書簡』（講談社学術文庫） 森茂起・港道隆編『〈戦争の子ども〉を考える』（平凡社） 中井久夫『戦争と平和 ある観察』（人文書院）（中井先生の他の戦争関連著作でも良い）
ご所属	甲南大学人間科学研究所